

ARPA・K NEWS LETTER

地域計画・建築研究所



暑中御見舞申しあげます

昭和59年 盛夏

京都 夏の風物詩 鴨川の床

アルパック ニュースレター もくじ

・発見すること、確かめること	—近況報告にかえて—	2
・北海道 ARPA・K より		3
・きんきょう	○あんずと観光 —長野県更埴市	4
	○ブラジルの建築家はつらいよ!!!	5
・一知半解	○おおざっぱな人口推計もおもしろい	7
・まちかど	○きのこ工場の再生	8

NO. **6**

発見すること、確かめること—近況報告にかえて—

三 輪 泰 司

1. アルバックニュースレター1年

昨年7月1日に、発刊記念号No.0をつくって満1年になりました。10年前—1974年に所内報「地域計画」を雑誌型にして同名の「地域計画」を発刊しましたが3号までしか続きませんでした。当時34名でしたが、とても荷が重すぎました。結局、隔月のごらんの通りの手軽なスタイルが分相応であったと思います。

これは文字どおり、ニュースレターで、紀要といったものでもありませんがひとつだけ特徴があるのは、自分でみつけたこと、たしかめたことを自分のことばでお手紙をさしあげるつもりでかいていることです。

それは、私たちの職能は、人と人とのふれあい、情報と情報の交流にこそフロンティアがあると信じているからです。ニューフロンティアをめざしての苦闘の中で得たことやまだ助走の段階のものもいろいろまざっています。

何だ、こんな水準か、とか野暮ったいなと私たち自身思うこともあります。現在を記録しておくという意義もあると思っています。

2. 業務の領域から、地域の活動から

6月12日、日本観光協会総会の機会に久しぶりで北海道を訪ねました。ここでARPA・Kの支所のつくり方にふれておかねばなりません。名古屋事務所はARPA・Kの支所だけ、九州事務所は支所と、九州地域計画・建築研究という独立法人の併設。そして北海道は、独立の北海道地域計画・建築研究所だけといううちがいをもっています。それぞれ成立の事

情によると共にどう発展するか見ている面もあります。

北海道の事務所は小樽にあります。有名な小樽運河沿いの古風なビルの中で、地元小樽を中心に頑張っています。先日も港には船が1、2隻しか入ってなくて淋しい風景でしたが、運河沿いの石造倉庫を改造したガラス製品の店や居酒屋が人気を集めていました。

北海道ARPA・Kも、昔の銀行のビルをビジネスホテルに変身させる仕事など、ユニークな活動をしている一方、NIRAの研究助成をうけて保存と開発の研究活動を組織しています。

京都事務所でも明日香村の調査や岡崎文化公園など1000年以上の幅がありますが「史的環境計画」とその技術がふえています。これからの研究・技術開発の領域です。

3. 国際的な人と情報の交流

昨年秋には北京清華大学の朱自煊先生をお迎えし、6月にはUCLAの学生が京都事務所をベースキャンプみたいにして熱心に日本研究にはげみ、表千家様にもご厄介をおかけしました。8月中旬には内蒙古自治区土木建築会常務理事祝捷先生らの3度目の訪日考察団が来訪されます。ブラジルからの研修生リリアン・ゴンドウはもう1年仕事をつづけます。個人的にはメキシコから京大建築の修士コースに学んでいるカルメン・サンチェスのカウンセラーをつとめています。

国際交流の障害も身をもって体験しています。

関西文化学術研究都市の中核、国際高等研

究所の設立準備をお手伝いしています。秋のバピロームウィルスに関するワークショップ共催を皮切りに実際の活動を開始すると共に財団法人化をめざして努力しています。つづいて連合大学院の構想にとりくんでいます。次には、新構想の都市づくりに、あるいは京都でのインダストリアにパークづくりでも国際的視野で推進してゆきたいと思ひます。

4. 「アルパックの長期展望と職能」

この標題は、7月13～14日の全所研修会のテーマです。2ヶ月前に実行委員会が編成され、基調報告案を提出しました。ハード・スケジュールですが、ARPA・Kでは教育研修は社長の職責とされています。業務報告、個人

報告などを全員から集め、仕事の中で、あるいはブレインストーミングで討論を積みあげています。

ARPA・Kも18年になりますと前進するために過去をよく分析することも大事になってきました。ちょうどトンネルを掘るように後の測点をしっかり固めておかねばなりません。

それと到達点から後退しないようにマニュアルもつけ加えたり改めたりしなければなりません。ちょうど、岩壁を登るように。

甘さを克服し、発想を豊かにするために大いにポテンシャルをあげ、充電につとめセンスをみがきたいと思ひます。よろしくご指導のほど、お願いいたします。

(みわひろし 代表取締役)

北海道 ARPA・K より

藤本 哲哉

北海道ARPA・Kは、小樽市を拠点とし、北海道全域を対象として業務を行っています。一口に全域といっても全国土面積の約22%、非常に広大です。車で走るならば500kmぐらひは日常的、飛行機で目的地まで(自家用ではありません)ということもたびたびです。

この他にもアルパックネットワークがめざす他の地域との大きな相違点は、北方圏、すなわち積雪寒冷地であること、年間の3～4ヶ月は降雪期です。そしてもうひとつ歴史が浅いこと、明治元年が一応の開拓元年ですから、まだ118年の若々しい地域です。事務所所在地の小樽市は、この歴史の新しい北海道の中では歴史の古い都市、明治から昭和初期の建造物が多く現存し、独自の街並環境を形成しています。

北海道全体としてかかえる課題と、広大な地域ゆえに都市各々がかかえる個別の課題と、テーマは山積です。おかげさまで満5年、第2ステップへ向けてスタートします。皆様方のご指導よろしくお願い致します。

(ふじもとてつや

北海道地域計画・建築研究所所長)



北海道ARPA・Kのある
小樽市色内1-2-18 通信浜ビル

あんずと観光

—— 長野県更埴市 ——

笠松 明 男

先日、私用で長野県更埴市をたずねる機会がありました。

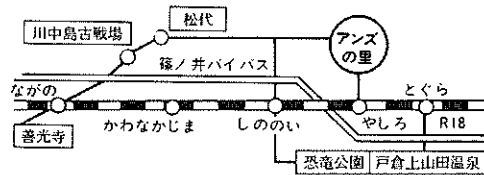
更埴市は長野市の南東約30kmに位置し、川中島の合戦で知られている雨宮の渡しとともに、あんずの里で有名な観光と農業の市です。この地は、幕末の活動家、政治家として知られる佐久間象山が家老であった信州松代藩領で、古くから、真田家によりあんず栽培が進められてきました。

私が市をたずねた時は、ちょうど市をあげての『あんずまつり』の最中でした。あいにく、今春の異状気象の影響であんずの開花も遅れ、やっと三分咲き程度でしたが、市の方の案内であんずの里を見学させていただきました。

あんずの里の目玉はなんといっても、春4月になると山あいをピンク色に染めあげる一



あんずの実
6月下旬
～7月上旬



目10万本、のあんずの花と、6月末から7月にかけてのあんず狩りです。その点では、一帯は広大な観光農園そのものですが、この農園の特色は、実は観光が目的ではなく、あんず栽培の歴史にみられるように、あんず栽培がこの地の重要な収入源になっていることと、その規模の壮大さにあります。そのため、市では、観光客に対し、次のような注意をしています。

「この里は一般の観光地と異なり、農家の方が大切に栽培している農園であり……（中略）……あんずの枝を折ったり草花をいじめないで下さい。」

このように、この地では、まず第一に農業収入の向上を目的とし、観光による収入に頼ることなく、安定した村づくりを目指しているように思われました。

こうした傾向は信州全体について言えるようです。たとえば、長野市では、国道18号沿いに、別名アップルロードと呼ばれるほど広大なりんご園が営まれています。これももともとは、特産品のりんご栽培の拡大化を目指していくなかで、いつか観光地化したようです。道路沿いのりんご直売店にしてみてもさほど力を入れて経営している様子はないがえませ

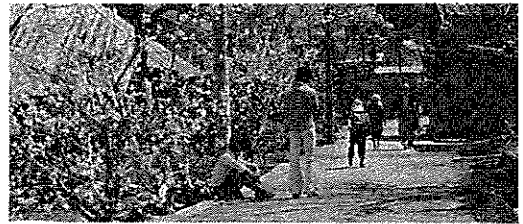
んでした。

しかし、こういったことがこれら観光農園の維持発展には欠かせないことであり、最近各地で、観光産業育成として行なわれている観光農園がなかなか成功しないのも、本来農産物として出荷し、それによって生計を立てる、という視点が欠けがちになっていることにあるように思えます。日常的な農園の維持・管理、あるいは拡大といったことは、農園に対する愛着とともに、重要欠くべからざる生活手段としての必要性の認識が求められます。特に、果実や花き栽培といった労働時間の要するものは、専従者が必要であり、観光収入だけではまかない切れません。また、そうしてこそ農園の美観が保たれることになるでしょう。

それはさておき、更埴市の場合、あんずの里の雰囲気を盛り上げているのは、やはり土道の存在と河川でしょう。あんずの里のある

森地区は、主要幹線を除きほとんどが未舗装であり、観光客も歩いて里めぐりをします。また道ぞいには沢山川（千曲川支川）の清流も流れています。ただし、沢山川については、57年、58年と度重なった下流部水害のため、コンクリート張り改修が進められていました。しかし河川改修もこういった集落景観にあわせて工夫する必要があると思います。これは、私たち河川技術者にも課せられた課題といえるでしょう。

（かさまつあきお 京都事務所）



ブラジルの建築家はつらいよ!!!

リリアン麗子権藤

‘サンパウロが損失したもの’、これは最近ブラジル建築学会・サンパウロ支部が催した展示会のテーマです。内容としては、過去30年の間にサンパウロ市のために計画され実施されなかった都市計画プラン様々を一般公開したものです。展示会が開かれるくらいですから実現しないプランも少なくないわけで、今回はそのうち50点が出展されました。どのプランも行政側が著名な建築事務所に依頼したもののばかりで対象地区のほとんどが現在で

も多くの問題をかかえ、対策を待ち続けているような所ばかりです。だから今回、放置されたプランをたたき台にして皆さんで討論しようじゃないかと呼びかけたわけです。ねらいとしては、都市問題、そして対策に関する問題をも含め、一般市民、特に地区共同体単位で問題意識を普及し高めようとするものでした。（週刊誌 ISTO 'E より）

ポルトガル語で上のようなプランをPRO-JETO ENGAVETADO（引き出しにしま

われたプラン)と言いますが、この用語は建築分野以外の人々にも通じ、未実現性より半永眠性のイメージの方が強い概念です。

未実現の理由として次のようなものがあげられます：

- 行政組織のまとまりの問題（組織性）
- プライオリティの選定（計画性）
- 予算（経済性）
- 方向転換、中断（継続性）

実に政権が変わるごとにプライオリティが変わります。そうすれば、中、長期的プランは裏にくいものです。部分的に実施され、当初計画とは全く別の進展を見せるものもあれば、バツサリ中断され放置されるものもあります。市民が完成をずいぶん期待して待っているような計画でも途中でほうりだされることがしばしばあります。

このような状況で実現可能な計画とはあまり広範囲でないもの、そして短期間に行なえるものになりがちですから、その大半が表面的な治療にすぎず、問題の根源をアタックするようなものにはなかなか得ません。

行政側にも都市計画局に相当するものがいくレベルにもわたってありますが、緊急対策にしか手の届かない行政にとって、都市計画部門はいつも取り残されがちです。

しかし、市民も建築家も無気力なわけではなく、近年においては特にコミュニティ活動を通じて両者ともに都市問題の把握を深めようとする傾向がみられます。今回の展示会も、市民、行政、専門家の参加によるパネルディスカッションがあったそうです。

まにあわせ主義は現在の発展途上国のどれをとっても言えることだと思います。先進国の魅力にあこがれ、基盤が整っていないまま次のステップを踏もうとします。自分のキ



サンバウロ中心部

ャパシティより速いペースで進もうとするものですからそのような所でむりや矛盾が生じてきます。その中で住宅問題は深刻な問題の一つで、これをアタックするために国レベルの住宅銀行があります。しかし低所得者層住宅に専念していたんでは運営が困難だということで、高級住宅や同質アパート建設への支出を中心とする政策を取ったことがあります。数的に見ると建築家が設計した住宅は5%にも及ばないと言われています。ずいぶんの活動余地があるように思えますが、まにあわせ主義では技術者の役割を余り重視しません。ですから建築家の場合も、建築家としての社会的役割の理解を広めながら実績を積んで行かなければなりません。

(リリアンれいごんどう 京都事務所)

※リリアン麗子権藤は、ブラジルより海外技術者研修協会の研修生として来日、57年度鹿島建設、58年度より当社にて研修

お知らせ

7月13日(金)14日(土)の両日は、所内研修会のため、事務所を留守に致しております。

たいへん勝手をさせていただきますが、よろしく願い申し上げます。

— 知半解 —

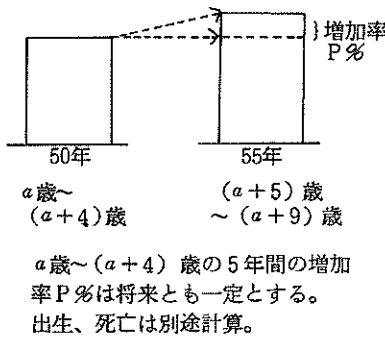
おおざっぱな
人口推計もおもしろい

松本 明

近畿圏（「京阪神大都市圏」よりひとまわり狭い範囲）の将来人口を「開放型」でおおざっぱに推計してみました（下図）。

昭和55年から70年の15年間で65歳以上人口は約1.6倍に増加しており、高齢化社会の進行は、各方面で指摘されているように著しいものがあります。

※ 開放型推計の考え方



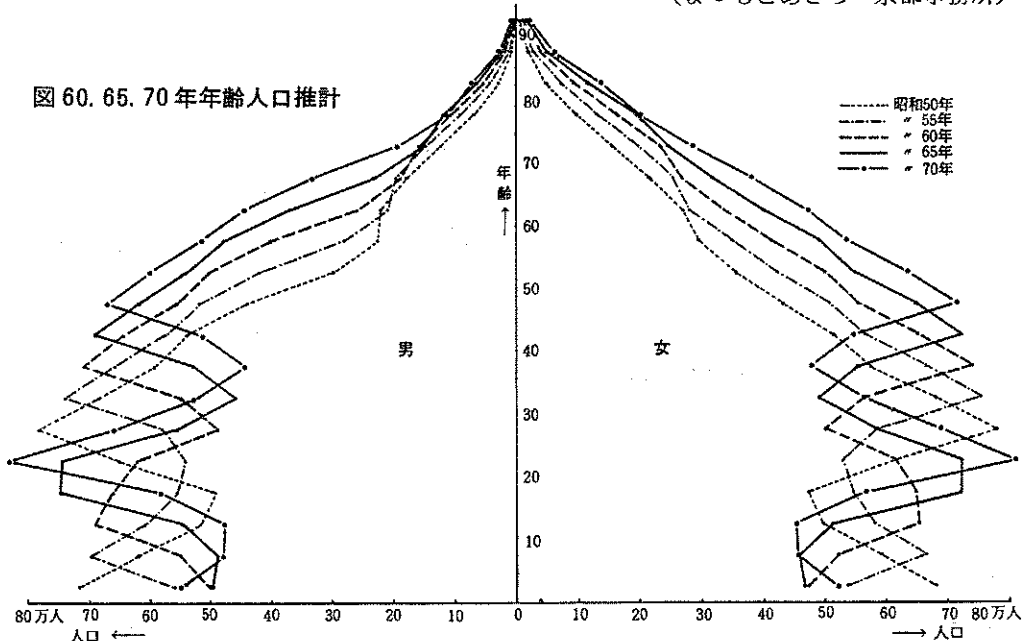
さて、注目すべきは、いわゆる「団塊の世代」、それより10歳程度若い世代（「谷間の世代」とでも呼べましようか）、そして団塊の世代の第二世代の動きです。団塊の世代は現在30代中盤に位置し、社会の中堅的な担い手として役割をはたしています（昭和55年時点で総人口に占める30代の比率は18.6%）。ところが昭和70年には30代はちょうど「谷間の世代」に当り、現在の30代の約7割にまで減少してしまいます。高齢化社会の進行プロセスで一時的に「中堅不足の時代」があるといえましよう。

産業構造の変化、住宅市場の冷え込み、余暇・レクリエーション需要の変化、etcの様々な影響が予測されます。

なお、この推計は過去の単純なトレンドであるため、実際には、こうしたいびつな人口構造をなだらかにするような人口移動の新たな圧力、たとえば30代の大都市圏外からの転入増加なども予想されます。

（まつもとあきら 京都事務所）

図 60. 65. 70年年齢人口推計



まちかど

きのこ工場の再生

石本 幸良

国道24号と京阪線が立体交差する少し南に、国道に面して、レンガ造の建物を改造したインテリアショップがあります。

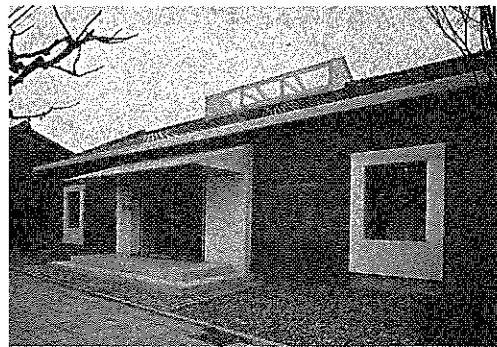
この建物は大正12年にきのこの研究のためにコークスレンガ造で建てられ、ここで日本で初めてのマッシュルームの栽培が試みられました。建物は2棟あり、1棟を昔、ここでアルバイトの経験のある方がインテリアショップとして再生させました。3間×5間の平面で、2m程半地下になっているため、外観はとても小ぶりで、中を2層に分け、トップライトを設けて、ギャラリーとオフィスが作られています。改造は「白」を基調とし、コークスレンガの落ちついた色と調和してやさしい建物になっています。

残る1棟は現在もきのこ菌の保存に使われていますが将来は工房として再生し、300坪の敷地の中で、人と人の、人と物の有機的なつながりのある「界限」作りをめざした計画が組まれています。

(いしもとゆきよし 京都事務所)



森本養菌園、奥にもう1棟見える



インテリアショップ「リパート」入口



奥に残る1棟

ARPA・K (株)地域計画・建築研究所

ARCHITECTS, REGIONAL PLANNERS & ASSOCIATES, KYOTO

- | | |
|--------|--|
| 本社 | 〒600 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82 TEL (075)221-5132代 |
| 京都事務所 | (大和銀行京都ビル8階) |
| 大阪事務所 | 〒540 大阪市東区石町1丁目1番地 TEL (06)942-5732代 |
| | (天満橋千代田ビル2号館) |
| 名古屋事務所 | 〒460 名古屋市中区丸の内3丁目18番30号 TEL (052)962-1224 |
| | (ツボウチビル6階) |
| 九州事務所 | 〒810 福岡市博多区中洲中島町3-3 児島ビル3階 TEL (092)281-2349 |